

すぐに入院し各種の精密検査の後「下喉頭部の腫れは悪性腫瘍です」と告げられ、治療が始まった。

以来、闘病生活約一年数回に及ぶ大手術を経て、平成十四年十二月二十六日に無事に退院することができた。

追 想

昭和二十年八月に北朝鮮咸鏡北道清津府で迎えた終戦から、私は数奇な運命を背負いながらも奇跡的な出会い、「山根部隊将兵による救出と、LS TQO十二号の旧日本海軍乗組員の配慮による単独帰国の実現」について心新たに感謝を申し上げますと共に、北朝鮮からの引揚げの途中において悲運な最後を遂げられた幾多の日本人同胞に、胸の底から万感の思いで合掌を捧げます。

大陸の夢破れて

岡山県 村岡英之

はじめに

今年もまた終戦の八月十五日がやってきた。

日本ではこの日が時代の区切りであるが、私たちソ連との国境に住んでいた者にとっては、八月九日が運命の日である。ソ連の参戦、居住地からの脱出という意味で忘れ得ない日となっている。約六十年前のことであるが、敗戦のころからその後のことを思い出して書いてみたいと思う。

一 海外移住の動機

岡山県を北から南に流れる三大河川の一つ、吉井川の中流域が私の先祖の住んでいた所である。いつの時代からかは明確でないが、先祖の墓は数多く林立しており、相当古いものである。村の畑は少なく、農業だけでは生計が困難で、江戸時代は水運業もやっていた。

岡山備前藩に、年貢米を輸送していた高瀬舟の元締めをしていたと伝えられている。そのためか、祖父の母は備前藩の武士の娘であり、祖父の祖母も年貢米集積地の役人から嫁入りしている。田畑

が少ないということは、兄弟が多い場合分けるところができない。祖父の弟はブラジルへ移民しており、私の父も三男で家を出るしかなかったと思う。

祖父は日露戦争で負傷し、金鵄勲章をもらいその恩給で生活していたが、三人の息子に教育を受けさせるほど豊かではなかった。高等小学校を卒業した後、父は岡山市の裁判所の書記となった。

当時の俸給は安く、昼食はうどん一杯食べるのがやっとの生活であったという。そのころ、父の従姉妹で商家に嫁いだ人がいた。この家の主人が朝鮮で店を持っており、嫁ぎ先も朝鮮となった。今で言えば、スーパーマーケットのような食品雑貨店を経営しており、店員は主として朝鮮人であった。だれか信用のおける日本人を雇いたいとのことで、父に白羽の矢が立ったようである。大正十

三（一九二四）年、父が十八歳のとき裁判所を辞して朝鮮に渡った。咸鏡北道茂山府という、朝鮮でも北の端である。

二 北朝鮮の生活状況

当時の北朝鮮はまだ治安が悪かった。この茂山付近は、反日抗日の金日成などの分子が活躍していたところであり、父の商売も危険を覚悟のものであった。日本の軍隊と警察が多数駐在しており、そこに物資を届けるため牛車や馬車で奥地へ向かったとのことである。近くには有名な白頭山、豆満江、そして中国国境があった。現在のテロのように、日本人を捕らえて身代金を要求したり、惨殺し、また警察署が襲撃されることが頻繁に発生した。父も商品の配達中、連絡もせず数日間帰らなかったことがあり、皆が心配し主人から厳しく叱られたそうである。

昭和四（一九二九）年、父も店の大番頭になり、郷里の近くから嫁を迎え、所帯を持った。

満州事変のあった昭和六年、私の兄が生まれた。

父は、昭和八年、私が生まれるとすぐ茂山を離れ独立して、羅津に食品雑貨店を持った。羅津は朝鮮北端の日本海に面した一寒村に過ぎなかったが、満州の食糧物資を日本内地へ送るため、新しく開港した街であった。若い夫婦に子供二人、見知らぬ土地でさぞ苦労したであろう。祖父母は同居しておらず、子供の養育も目が届かなかったのか、乳児の私が火鉢の上にあつたやかんの熱湯を浴び、足に大やけどを負っている。最初の記憶は、二歳か三歳のころ水害に遭い、店内の商品を父が急ぎ動かしている様子である。私たちの靴や下駄が水に浮いて流れる様子、そして隣家の二階に避難したことを覚えている。この家の付近は新しく川を掘ることになり、立ち退きとなった。折しも新商店街を建設中で、その一角の東の端へ店を構えた。その後一年おきに妹が二人生まれ、家族は六人となった。

水害に遭い、運の悪い父はさらに悪運が続きまತ್ತた。母が病氣となり、下痢が続いた。最初、

なものであつたか、記憶が判然としないが、羅津の街は比較的平和で、明るく自由に過ごしていたように思う。昭和十二年に始まった支那事変が続いており、ときには戦勝記念の旗行列や、蔣介石の人形を棒の先につけて提灯行列をしていたが、羅津には大きな影響はなかった。

十三年七月、張鼓峰事件といつて、羅津の近くで国境問題から日ソ両軍が衝突した。砲爆撃の音が羅津まで聞こえたが、すぐに停戦し、ことなきを得た。

兄が研修旅行で現地へ行き、砲弾の破片を拾ってきた。破片の縁は鋭利な刃物のようであり、人間に当たったら即死すると思われた。満州防衛の関東軍の移動が多かった。当時は、兵隊の民宿が何度かあり、私の家にも毎回数人ずつ泊まり、母が二階へ食事を運んでいたのを覚えている。まさに、軍民一体となって大陸の防衛に当たっていたと言えよう。

昭和十四年、遠く離れた中ソ国境でノモンハン

近所の医師は単なる下痢と診断したが回復せず、大きな満鉄病院に診てもらったところ、腸結核と診断された。当時は結核菌に対する特效薬はなく、昭和十二年の秋、四人の子供を残して死亡した。当時、兄は小学一年生で学校へ、私は四歳で、父と二人病院で母の最期を看取った。葬儀は、店の前の広い空き地で行われた。新天地の日本人は団結が固く、写真では多数の人が参列していた。

残された妹二人、二歳と零歳は、それぞれ子供のいなかった他家に、養子としてもらわれていった。父一人で四人の子育ては無理であった。再婚も一回ではなかった。最初父の兄の未亡人と再婚したが、一年ぐらい同居のあと別れることになった。連れ子の女の子と二人出て行った。夫婦で争っていたのを覚えている。それから間もなく、私の実母の妹と再婚することになった。私たち兄弟とは血がつながっているためか、わがままな継母であつたが、落ち着いた家庭生活が続いた。

昭和十三年から十五年ころの世相は、どのよう

事件があつた。しかし羅津には影響がなかった。

昭和十五年は皇紀二千六百年という、めでたい年であつた。私はこの年、小学校へ入学した。羅津では幼稚園はなく、毎日退屈していたので喜んで通学した。紀元二千六百年の歌が流行していたが、私は全然知らず、友だちが歌うのを聞いて覚えたものである。小学校の制服制帽は濃紺の毛織物で、皆きれいな一年生であつた。

昭和十六年十二月八日、寒い朝であつた。ラジオから流れる「臨時ニュースを申し上げます」は小学二年生の私には、何か重大なことが始まったくらいの感じであつた。父は「ついにやったか」と言つて緒戦の勝利を喜ぶと同時に、一抹の不安をのぞかせていた。しかし羅津の変化は少なかった。小学校が国民学校と名称が変わり、教育内容も軍事色が濃くなったぐらいである。中国の奥地や太平洋の彼方での戦争を、新聞やラジオで知る程度であつた。そして、日本はいつも勝利していると思つていた。昭和十九年までの世の中の移り

変わり、衣食住はどのようなものであったか。

我が家では、継母が女の子ばかり三人続けて生み、一家七人となり賑やかになっていった。店の商売は、統制経済下で商品が少なくなっていた。しかし、我が家は幸運にも地区の食糧配給の権利を得て、以前より繁盛していた。以前は客の注文を電話で聞き、朝鮮人の店員が自転車で配達していた。それが配給制となり、朝鮮人などが券を持って店の前に行列を作るようになった。これまで運の悪かった父にも運が向いてきて、この戦争中の数年が父にとって「我が世の春」であった。衣料品は質量共に低下して、私たちの着るものも国防色の粗末な衣服に変わった。靴も配給となり、朝鮮人の中には暖かいときは裸足で登校する者もいた。食品も我が家は充分であったが、日本人でも困る者が多かった。中には弁当を持ってこられない子供に、先生が弁当の蓋で分け与えていた。

軍事面では、この間直接大きな問題はなかった。満州への軍人の移動は続いていた。前半は内地か

ら満州へ向かって行き、私の家にも民宿した。父は酒肴を出して歓待していたが、兵隊たちはやや元気がなかった。聞けば、召集で家族を内地に残しての赴任とのこと。あとのこと心配で、気分も高揚しなかったであろう。後半は、満州から羅津に来て港を出て行く兵隊が多くなった。民宿だけでは足らず、小学校の校舎にも泊まるようになった。従って、私たちの授業もできず休みが多くなった。人員だけでなく、兵器や軍需物資も港に集積され、次々と船積みされて出て行った。南方の戦場へ行ったのか、あるいは本土決戦に備えて内地へ送ったものであろう。関東軍の精鋭を引き抜いて他方面へ輸送し、満州は大丈夫だろうか、子供ながら心配したものである。

三 終戦前後の生活の状況

(一) 終戦前の生活

昭和二十年は、私の人生で最も忘れ得ない年となった。寒い冬も終わり、ようやく春めいてきた四月、父に召集令状がきた。数え年四十歳で若い

ころ結核を患っており、まさかと思ったが、それほど兵力が不足していたのだ。明治生まれの父は、皇軍の一員となることを喜んでいて。早速、店の前に台を置き日章旗に寄せ書きを依頼した。来客が多く、すぐ書くところがないくらいになった。

商売は続けなければ、食品店として配給の義務が果たせない。あとは母に任せて、勇んで任地へ旅立って行った。兄は中学三年、私は小学六年、妹たち三人は就学前であった。小学校の男の先生たちも、次々と召集されて行った。残るのは、女の先生と代用教員のような十八歳くらいの先生であった。

出征兵士の留守番を応援するといつて、私の友人たちが、我が家の少しばかりの畑に手伝いにくてくれたものである。

港の荷積み作業は、次第に忙しくなっていた。

我々小学生にも勤勞奉仕の役目がきた。港における大豆、トウモロコシなど地上にこぼれたものを拾い集めることであった。当時穀物を入れるのは

麻袋であったから、労働者が手かぎを掛けて担ぐと破れるのだ。小学生の海戦術で拾い集め、食料として再利用したものである。港には大量の満州産穀物が山積みされ、その情景は壮観であった。これをまとめて内地へ送ればと思ったが、船舶の輸送は現在のようなコンテナ輸送でなく、能率が悪かった。大連から「愛勤隊」という労働者が大量に来て、肩に担いで船積みしていた。港湾内は、荷積みを待つ輸送船が多かった。羅津港は開港以来の活気があり、大陸と内地を結ぶ大動脈となっていた。この輸送路を米軍が感知したのであろう。日本海に敵潜水艦が出没するようになり、羅津湾にも対潜水機が配備され、中学生がその基地建设に勤勞奉仕していた。

夏になると、晴れた夜空にB-29が飛んでくるようになった。目的は機雷の投下である。空襲警報が鳴り、防空壕から見ていると、探照灯に捕捉されたB-29の機体から、豆粒のような黒い物が散布された。落下傘が開いて海上に落ちていくの

で、静かであった。我が方の対空砲火が一斉に火を吹くが、敵は高々度を飛んでおり、弾は途中で放物線を描いて落ちてくるのであった。夜空に曳光弾がよく見えた。何回か来襲したが、一機も撃ち落とすことはなかった。そのためか、港の後ろにある山の頂上に高射砲陣地を作ることになり、小学校の我々が勤労奉仕に出た。コンクリートの台座を作るため水が必要で、麓から子供たちのバケツリレーで頂上まで運び上げた。夏の暑い日、何日か通って台座が完成した。高射砲は内地からの船で沖に停泊しており、陸揚げ前とのことであった。しかしその勇姿を見る前に、私たちは羅津から逃げ出さねばならなかった。

(二) ソ連の参戦

八月八日深夜、飛行機の爆音で眠りをさまされた。警報はなかったが、急いで防空壕に入った。夜空を見上げると照明弾が次々と落とされ、羅津の街は白昼のように明るくなってきた。灯火管制の訓練も役に立たないことが分かった。初めて見

る照明弾は、白い煙を出しながらゆっくり落下し、中空で停止して青白い光を出し続けるのであった。間もなく猛爆撃が始まった。それまでB-29の機雷投下は、爆音のみで静かなものであり恐れることはなかったが、爆弾の音はものすごく、爆風も強かった。空を見ると、小さな戦闘機が上下左右飛び回っていた。これは米空母が羅津の沖にきて、艦載機が飛来したとのものであったが、撃ち落とされた飛行機にソ連のマークが付いていたことから、ソ連の参戦を知った。

八月九日の昼も爆撃が続き、港の船や埠頭の物資が大損害を受けているようであった。内地へ送る予定のドラム缶の集積地に火災が発生し、終日轟音をたてて空中に舞い上がり、破裂して落下していた。

開けて八月十日、爆撃が続くので我が家の防空壕では危険と思い、山腹に掘られた横穴式の壕へ移動した。壕の中は、朝鮮人で満員となっていた。外で見ていると、ソ連戦闘機が二機編隊で港の船

船めがけて降下していったが、我が機関砲の応戦はなく、爆弾を投下して飛び去って行った。当日正午ころ、隣組の組長から、敵の上陸が予想されるので羅津から脱出するように、との伝達があった。

一家は早速リヤカーに食糧、衣類、布団と妹を乗せて家を出た。それまで、我が家を捨てて逃げ出すなど考えてもいなかったので慌てた。海岸線を通って南下する人々もいたが、開けた土地は空爆や艦砲射撃で危ないと判断し、山へ向かった。

途中、羅津一の大和ホテルの壁は弾痕で傷つけられ、中心の大橋の中央は爆弾で大きな穴が開いていた。中央通りの銀行、郵便局、警察署などのガラスが割れており、人のいる気配はなかった。最も残念に思ったのは、この道を日本軍の兵隊と偽装網をかぶせた大砲を積んだトラックが、何台も通り過ぎていったことである。この軍隊は、ソ連との国境に配備されていたものであろう。どのような作戦かは知らないが、居留民を尻目にして南

下して行った。

やがて山の麓の中学校の近くまで来たところで、満鉄地区から歩いてきた人々と合流した。要塞司令官の家族もその中におり、軍人といえども家族は別行動であることを知った。この家族には双子の姉妹がいて、二人共小学校の先生として着任して間がなかった。中学校は野戦病院となり、軍のトラックが負傷者の搬送で忙しく出入りしていた。その細い水路から、赤い水が流れ出していた。多分、負傷者の血が流れていたであろう。

山の急斜面にきてリヤカーは登れなくなり、やむなく置いていった。布団も捨て、妹たちを歩かせて山へ登った。午後遅く、ソ連の軽爆撃機が四機編隊で頭上を通過した。我々の隊列を発見したのか、機銃の音がしたが被害はなく、南へ飛び去った。

夕暮れとなって山の上で野宿することになり、先ほど捨てた布団を私が拾ってきた。夕食の米はあったが水がなく、持っていた酒で炊いてみた。

これはまずく、水を探して炊くべきであったと反省した。夕闇迫るころ、近所の奥さんが「私を置いて行かないで」と言っており、お互い哀れを誘っていた。

翌朝から本格的な避難行進が始まった。約八十キロメートル先の会寧を目指し、野を越え山を越え、川を渡り歩いた。全行程四泊五日であったが、日付ごとの記憶は少ない。食べるものも、途中何を食べたか覚えていない。宿泊は山の中や朝鮮人農家の軒先、土間などであった。どこへ行っても満員で、部屋の中へ入ることはできなかった。私は十二歳で、歩くことは問題なかったが、母は二歳の妹を背負っており苦労した。最も困ったのは四歳の妹で、歩き続けて三日目、ついに歩けなくなった。家を出る前、夏風邪をひき微熱があったのを無理に連れてきたもので、意志の強い子であったが最後の抵抗か、地団駄を踏むようにして歩かないと言った。私が背負うには重すぎ、兄は食糧など重いリュックサックを担いでいる。どうに

けての睡眠であった。

翌朝、まだ寝ていると隣室で日本人の声があった。いつの間にか二人の男が侵入し、留守を良いことに押入を物色、衣料品を盗んでいた。どさくさまざれとはいえ、情けなかった。静かに寝たふりをして、やり過ぎた。

朝八時ごろ駅に行つたところ、駅に火をつけるので離れるように言われ、外の線路側で待っていた。戦闘機が一機、駅裏の飛行場へ着陸し、びっくりした。ソ連機が飛行場の偵察にきたものであろう。やがて何事もなく飛んでいった。列車がきた。客車である。家族六人一緒に座れた。満鉄の人が運転しているためか、北へ向かって走り出し、豆満江の鉄橋を渡って満州に入った。鉄橋を渡るとき、砲爆撃の危険があると、皆一斉に列車の床に伏せたものである。

また、あるトンネルの中で停車した。伝令によると、外は爆撃が続いているので安全になってから出るとのこと。やがて、トンネルを出て満州最

かなだめすかし、歩行速度をゆるめて会寧近くまで来た。軍隊のトラックがピストン輸送で避難民を会寧まで運んでおり、母と妹たちは乗せてもらった。兄と私は、さらに歩いて会寧に向かった。

会寧郊外で軍の駐屯地前を通つたとき、入隊していた小学校の先生に会った。受け持ちだったのでよく知っており、家族の消息を聞かれたが、「知りません」と答えるのみであった。私は足にまめができ、靴を持って裸足で歩いていた。惨めな姿を先生に見られ恥ずかしかったが、それどころではなかった。

やがて会寧駅に着いた。ここで待ち合わせと母に言われていたので、二人で待っていた。折から避難列車が出発する前で、その汽車に皆、我先に乗っていた。もしや、母たちも乗り込んでいるのではと思ったが、約束通り待った。これが、十四日の夕方のことである。やがて母が迎えに来てくれて、知人の厚意で駅前の日本人の留守宅へ泊まることになった。四日ぶりの、畳の上で布団を掛

初の駅、凶們に差しかかった。指令があり、窓の左側の暗幕をおろし外を見ないように、と言われた。それでも、大人たちは窓の透き間からのぞいていた。私も少し見たが、列車が横倒しになり負傷者が多数いるようであった。これが、後に語り継がれた「凶們の爆撃」である。私たちはひと列車遅かったので、命拾いをした。人間の運命は一寸先が闇という。妹たちが元気に歩いて、早く会寧駅に着いていたら私たちもこの列車に乗り、死んでいたかもしれない。

次に延吉の駅に停車した。駅から少し離れたところで、野原で用便ができるよう考えたものと思う。炊き出しがあり、大きな握り飯が一個ずつ渡された。四歳の妹はいらなないといって食わず、兄と半分ずつもらい妹に感謝した。妹の体は弱っていた。

十五日、敗戦の日の正午ごろである。出発した列車の中で、日本が負けたらしいという話が伝わってきた。次に停車した敦化の駅で、中国人の様

子がおかしかった。我々の避難列車を笑顔で見ている。いつもと違うのである。敗戦が確実になると、列車内は途方もない予想の話が始まった。男性は強制労働になり、女性は強姦されてひどい目に遭うのではと、負けたことのない日本人にはこれから先が分からなかった。私も子供心に心配であった。

多くの不安を乗せて汽車は西へ走り、夕方遅く吉林駅へ着いた。ここで車内泊となり、翌十六日の朝は静かに明けた。駅構内は静かだった。敗戦のために、皆呆然として何をするか分からない状況だったのであろう。

吉林の街は山が多く、山紫水明の地であった。樹木の緑が鮮やかな美しい風景は、敗戦で意気消沈した私たちの姿とは対照的であった。吉林を出発し、汽車は南西方向に走った。途中、小さな駅で北東行きの列車と同時に停車した。見ると日本軍の列車で、兵隊は武器を持たず丸腰であった。現地召集の人であり、家族の待つ北の街へ帰る列

体に整然として美しい所であった。柳の街路樹が、雨に濡れて緑鮮やかであった。収容所は日本のお寺の旧本堂の大部屋であり、約百二十人くらいで住むことになった。あとの集団は、学校の講堂など板の間生活であったから、我々畳の部屋は運が良かった。

収容所に落ち着いて一週間ほどして、弱っていた四歳の妹が死んだ。食事を受け付けず、医師に診てもらうこともなく、精も根も尽き果てた哀れな死で、収容所第一号の死者となった。まだ火葬場が機能しており若い男性グループのリヤカーに乗せられて行き、遺骨となって帰ってきた。死因は、風邪をこじらせた肺炎だったと思う。しかし元看護婦だったという人が、アメーバ赤痢ではなかったかとうわさを流し、母が打ち消すのに苦労していた。日本人として助け合わなければならないとき、冷たい人もいたものである。

撫順での避難民受け入れは、役所が活躍していたようである。収容所の割り当て、食糧の配給、

車であった。あとで知ったことであるが、関東軍は居留民を置いてまず南下し、対ソ作戦の準備中に終戦になった。兵隊たちは列車内でやけ酒を飲み、良い気持ちになっていた。中国人の物売りが、我々婦女子の列車で食品などを売っていた。酔った日本兵が私物の日本刀を抜いて、安くしろと脅していた。商人は年寄りで、頭を下げ愛想笑いをしてきた。我々の客車の屋根には、どこから乗ってきたのか若い中国人たちがおり一触即発であったが、鋭い目で見ているだけで大事には至らなかった。思えば、日本人が強かったのはこのときまでであった。汽車はさらに南西に走った。草原にある日本商品の広告塔や、日本人が造ったと思われる美しい工場も、敗戦のためか何か寂しいように思えた。

(三) 撫順での生活

終着駅の撫順に着いた。八月何日だったか記憶にない。小雨降る中、リュックサックを担いで収容所まで歩いた。撫順市街は日本人の設計か、全

衣類の世話など、当時としてはよく活動していた。食糧は米と高粱が主なもの、粟もたまに支給された。炊事は婦人会で班を作り、私の母も班長になり活躍していた。衣類も古着が支給され、私は大人の上着を切つて、前はダブルのような服を作つて着た。布団は、炭坑の中国人労務者用の黒い薄いものであった。中国人用は、品質の悪いものである。

(四) ソ連軍の横暴

やがてソ連軍が進駐してきた。ある夜、寝ていると話し声がする。見ると、二人のソ連兵が室内を物色していた。積んでいた布団袋を刃物で切り開き、貴重品を探していたが、我々に危害を加えることなく去って行った。女性に対する暴力も要注意であった。母も丸坊主にして、平素日本手ぬぐいをかぶっていた。ソ連兵侵入前に女性は別室へ逃げ、残ったものが拍手で迎えるように決めていた。

ある日、紳士的な美しい軍服を着た下士官が来

た。ロシア語を教えてもらうことにして、皆騒がずに迎え入れた。中年の男性たちが紙と鉛筆を持ち、手まねで教えてもらい筆記した。それが済んで、帰る前に夫人たちを物色し始めた。私たちが一番美人と思っていた二十歳くらいの独身女性の手を引き、別室へ連れて行った。子供の私は用がなく外に出ているとき、先ほどの女性が勢いよく飛び出してきた。裸足で血相を変えて建物の裏側に隠れた。ソ連兵を振りきって逃げたと分かり、安心した。部屋に戻ると、ソ連兵はまた別の女性を探しに来て、既婚の若い夫人を連れて行った。夫も同席し乳児もいたが、若い夫は障害者で何もできなかった。この夫婦は兄と妹ということで、夫の理解があった。やがて帰ってきて、乳児を二人であやしている姿にほっとしたものである。殺されるよりは良いが、敗戦国民の悲哀を感じた場面であった。

あるとき、寺の庭で遊んでいると、ソ連兵が来て大人たちに腕時計を出せと言っていた。勇氣あつた。その後、近くの收容所になっていた小学校で死亡事件が発生した。ソ連兵が女を出せと言ってきたのだらう。入口で警備に当たっていた中学三年生が、中に入れないよう押し返したら銃で撃たれた、このことであつた。兄の同級生であつたから、悲報はすぐ届いた。数日後、私たちの寺で家族のみ数人集まって読経していた。無抵抗な中学生の哀れな事件であつた。しかし、悪いソ連兵ばかりではなかつた。あるとき、收容所の窓をたく者がいるので開けたところ、大きなロシアパンを投げ入れてくれた。ある婦人が、ソ連兵の洗濯物を洗ったお礼として持って来たものらしい。分けてもらい食べてみたが、酸味が強くあまり美味しいものではなかつた。

五 八路軍時代

秋も深まるとソ連軍の大部分は移動していき、代わって八路軍が入ってきた。軍紀厳正というところで安心していただけ、ある日、酒に酔った兵が一人收容所に入ってきた。小銃に銃剣を着け、奇声

る中年の人は、自ら腕まくりして腕時計はないと示していた。このころは売り食い金銭を得たので、皆貴重品は持っていなかった。私の母も腕時計を一個、二個と中国語のできる人に頼んで売ってもらい、生活費に充てていた。予想より少ない金額でしか売れなかつたときは、売人にピンハネされたと母が恨んでいたものである。

ソ連軍は、個人の資産だけでなく、公共のものも取り外して本国へ送るようになった。このとき、日本人労働者を使うのである。日当十円で募集があり、私も兄と二人、大人と共に行った。着いた所はこの街の発電所で、ソ連から技術者も来ていて、重要な機械類を取り外していた。その後片付けが私たちの仕事で、ソ連軍も協力していた。大きな戦車を使って重量物を引き、電柱なども引き抜いていた。力強い戦車を見て、これでは関東軍に勝ち目はなかつたと思った。子供の私たちには特に仕事はなく、何をしたら覚えていないが、帰るとき十円札一枚ずつ渡され母親に喜ばれた。

を發して歩き回る。婦女子に剣を突きつけ、その後天井に向かって一発撃ち込んだ。室内だから大きな音が響き、天井に穴が開いた。だれかが憲兵隊に電話したのであらう。四人ほどの隊員が来て取り押さえてくれた。隊長らしい人が、流暢な日本語で全員に謝り、厳しく罰する旨説明して帰った。ソ連軍とは違うと思つた。その後、八路軍による事故はなかつた。

満州の冬は早い。十一月になると寒さ厳しく、その上役所からの食糧も支給されなくなつた。婦人会の炊事班も解散し、自分で稼いで自分で調理するときにきた。売り食いしたくとも、リュックサック一個で逃げてきた者には金銭になる物はなかつた。母が餅を仕入れて街頭で売ったり、兄も炭坑の労働者として働き始めた。

食事も悪くなり、末の妹が二歳でこの世を去つた。病名も何も分からない。多分、慣れない高粱や粟の食事で栄養失調によるものである。他にも老人、子供たちが次々と死んでいったから、や

むを得ないと思つた。

母は、現状のままでは一人残つた長女も死んでしまふと思つたのであろう。最も安全な中国人管理職の家で女中奉公することになり、長女を連れて住み込んだ。私たち兄弟は、そのまま収容所に残つた。しばらくして行つてみると、妹はよく太り、血色も良く安心した。兄は炭坑労務者として働き続け、わずかな賃金を得ていた。私も遊んでいては食えないので、石炭拾いに行くことにした。撫順は露天掘りの炭坑の町である。炭坑に行けば、すぐ拾うことができる。但し監視の目をくぐつてのことで、泥棒と同じである。道徳的には問題であるが、生か死かの瀬戸際に立つと金銭を稼いで食糧を買い、生きていかねばならない。南京袋で子供用の小さい袋を作つて背負い、無料の電車に乗つて炭坑へ行つた。中国人で満員で油臭く、大人の中に埋もれるようにして通勤した。途中の駅名に「大山」とか「東郷」とか、日露戦争の将軍の名が付けられていた。見張りが少ないと思ひ、

である。

一月の寒い朝、頭が痛く熱もあり寒気がしたので、そのまま寝ていた。兄が知らせたのか、女中奉公中の母が飴菓子や簡単に食べられる食品を持つて見舞いに来てくれた。数日寝ていて元氣になつたが、病名は発疹チフスであつた。虱しひみの媒介によるもので、満州ではだれの衣服にもいた。体力の弱い子供や老人は、このチフスが原因で死亡した。あのソ連兵からロシア語を習い紙に書き留めていた三十代の男性も、しばらく高熱にうなされていたが、やがて死んだ。その四歳ぐらいの一人娘も死に、奥さん一人残された。

他の収容所でも発疹チフスは大流行し、火葬場は満員。仕方なく、戦争中に掘つた防空壕へ積み重ねて入れた。日本人が最も多数死亡したのは、この発疹チフスによると思う。

旧正月もこの寺で迎えた。中国人が外で鳴らす爆竹の音が、銃声のように響く生活が続いた。近くの小学校では毎朝早く八路軍の訓練があり、寒

一番遠い露天掘りで石炭を拾つた。毎日ではなかつたが、二日か三日に一度、帰りに中国人街で売りさばいた。重さ二十キログラムぐらいの石炭を担ぎ、ひな壇に架かっている垂直に近いはしごを何段も登るのは苦しかった。私が上手に稼いでいるのを知り、収容所の大人の人が案内を頼んでくれた。一緒に行き石炭を袋に詰めて歩いていいたとき、監視人に見付かつた。中国語で何か言われたが、私には分からない。幸い連れの人は元特務機関の人で、中国語で静かに応対していた。しかし泥棒には違いなく、石炭を置いていけという。頼んで商売道具の袋だけは返してもらつた。

冬が近づくと、避難民の中で満鉄関係者は社宅に民宿、同居することになった。他のお寺が空いて、私たちも約半数が広い寺へ引越した。街の中心部のお寺で、買い物など便利になつた。石炭泥棒は続けた。寒い雪の降る日でも、食べるためには行かねばならない。雪をかき分け濡れた石炭を袋に詰め、冷えた手をこすりながら帰つたもの

い中を駆け足で一、二、三、四と大声を出し、軍紀厳正な姿を見せていた。

(六) 国府軍来る

少し春めいてきたころ、国府軍が攻めてくるとうわさが立ち、間もなく市街戦が始まつた。銃声が続いたが、一日で片が付いたらしく静かになつた。八路軍が逃げ足も早く、あっさり街を明け渡した。街に外出した人の話では、死体が放置されていたとか、逃げるときは私服に着替え馬車で逃げた、とのことである。日本人に危害は加えなかつた。

四月になると、引揚げの話が伝わってきた。今まで何回もだまされてきたが、国府軍は米国の支援を受けているので、本当かもしれないと言つていた。私たちは、三度目の移転命令がきて、日蓮宗のお寺へ引越した。ここは大通りに面し、国府軍の駐屯地にも近かつた。軍の車両は米国製の十輪車で力強く、軍人の服装も新しいものであつた。少し異様であつたのは、傘を持つたり、進駐

してくるとき隊列後方に大きな鍋釜を担いでくる姿であった。街は急に明るく華やかになり、中国人の女性も美しくなった。軍の将校と、馬車に相乗りしている娘さんも見かけるようになった。

政権が代わると炭鉱の監視もゆるくなり、中国人の大人たちも平気で石炭泥棒をするようになり、私もその中に入って稼いでいた。あるとき、重い石炭を担いでやつと地上に出たところ、馬車が一台待っていた。日本語のできる兵隊が、石炭を軍に供出せよと言っていた。仕方なく私も石炭を没収され、この日の稼ぎはなかった。民の物は盗らないという八路军とは違った一面を見た。

腹を空かしても、だれも食事をくれる者はいない。収容所内でも金持ちには白米を炊き、貧乏人は高粱や粟の飯であった。

四 引揚げ前後の様子

やがて、五月になると引揚げの話が本格化してきた。六月一日から引揚げ開始とのことで、私たち開拓団と一緒にいた者が第一陣に決まった。準

備といっても、持って帰る物もなく簡単であった。母と妹も合流し、母が稼いできた金銭、一人当たり千円が全財産であった。

引揚げ当日、持ち物検査があるという。全員グランドに並んで、地面にリュックサック内の物を広げた。若い中国人男女が一斉に検査した。目的は不明であったが、刃物など危険な物が取り上げられていた。私たち一家は何事もなかった。

それから駅まで二キロメートルの道を徒步行進した。沿道には第一陣だから興味があつたのか、大勢の中国人が見守っていた。汚い服装で小さな袋を背に力無く歩く姿は、彼らに何と思われたであろう。私たちは恥ずかしく、皆下を向いて歩いた。敗戦国民の屈辱を十分に味わった。列車は貨物車ばかりであった。私たちは運良く有蓋貨車で安全だった。

奉天（瀋陽）に停車したときは、日露戦争の奉天入城の写真を思い出し、あれから四十年、日本の時代は終わったと思つた。一路満州平野を南下

した。こんな立派な土地を置いて逃げ帰るのは、惜しい気がした。線路脇には、発電所の蒸気タービンが転がっていた。ソ連軍が輸送途中に転落させたものである。汽車は快適に走った。兄たちは狭い車内を出て貨車の屋根に登り、大平原の景色を満喫していた。途中の駅で、北方行きの列車と同時に停車した。向こうはきれいな客車で、中国人が乗っていた。中に国府軍の将校もおり、我々の惨めな姿を見て笑っていた。

汽車は錦州に着き、ここで船便を待つ期日調整をした。日本人住宅の空き家に宿泊して数日過ごした。中国人が食べ物売りにくるが、金銭がなく横目で見ただけであった。八路军のスパイが国府軍に捕らえられ、大木に吊され下から銃で突かれ、リンチを受けていた。スパイは固く口を閉じ、最後まで白状しなかった。八路军の強さを見せられた。

錦州から葫蘆島コロトウまでは少しの距離であったが、途中若い独身男性は軍の使役に使われるとの話が

あり、急いで偽の夫婦を作り調査に備えた。葫蘆島近くの丘の上に多数の砲弾が積まれており、若い日本人がその労務に服していた。敗戦国民は苦勞するものである。葫蘆島から米軍貸与のLSTに乗り出港した。大陸との別れである。一日も早く帰りたいと同時に、雄大な景色に惜別の情もあった。船の左側に朝鮮半島が見えだしたころ、羅津で親しかった老人が死んだ。菰こもにくるまれ、甲板から黄海へ吸い込まれていった。汽笛を鳴らし一周したが、内地を目前に哀れであった。その後、玄界灘で船は大きく揺れ、私も船酔いして寝ていた。隣にいたあのソ連兵を振りきった女性が、「船酔いとは男らしくないね」と言った。

佐世保の港外に着き、数日上陸を待ったが、伝染病発生のため博多港へ行くことになった。途中、五島列島の家の灯火が幸福な家庭を思わせ、私たちが一年間遠ざかっていただけに、感ずるところが多かった。

博多上陸前、父が迎えに来ていた。母が船の上

から岸壁の父に向かって、涙声で妹二人の死を報告していた。父さえ一緒だったら、と思つたのだろう。

五 生活安定の状況

博多から汽車に乗り、本籍地へ帰った。伯父の家に十日間ほど滞在したあと大阪へ行つた。ここで家と職を探したが共に難しく、二十日間くらいで岡山へ帰つた。住居がなく、最初寮の飯場のよくな所で泊まり、その後寮が空いて移動した。六畳一間の両側に二段ベッド四人分が装備された部屋である。

私は小学校六年に編入した。満州での一年間の休学のため、やむを得なかつた。

父の仕事として、知人の紹介で玩具の販売を始めた。店もなく、自転車で小売店に卸して回る仕事であつた。兄は学業をやめ、土建業に就き高所作業の危険な仕事で稼いだ。

私は小、中、高と勉強させてもらつた。父が小学校しか出ていないので、教育には理解があつた。

港町の発展で意気揚々としていた。それが、敗戦で家も土地も財産も、商売の権利までも失つて裸一貫となつた。父の青年期から壮年期の苦勞も、水泡に帰した。父は、骨を大陸に埋めるつもりであつた。私もまた、学業を終えて満鉄に入り、満州平野を縦横に駆け回る計画であつた。人生計画、大陸への夢は破れた。

学費の少ない公立校ばかりで、私もアルバイトをいろいろとした。手内職で袋貼り、小さな菓箱作り、そしてうさぎを十羽ばかり飼つたりもした。野草だけでは足りず、農家のレンゲ畑のレンゲを採つて叱られた。同級生の家だったので、学校で恥をかいた。

高校に入ると、父の手伝いとして子供用の菓子店に売って歩いたり、菓子工場の木箱作りに精を出した。兄の土建現場で、基礎杭の電柱ぐらいの丸太の皮をむいたこともある。父と兄の収入でどうにか生活は安定し、住居も市営住宅が当たつて二間に台所、便所の付いた家に入居できた。死んだ私たちの妹の身代わりとして弟が生まれ、家庭内も明るくなった。

その後、私は大学へ進んで家を離れ、私の戦後はやつと終わった。

あとがき

思えば、父が大きな夢を抱いて大陸に雄飛して約二十年、一応商店主として店を構え店員も使い、

北朝鮮の空、父は遠くに！

長崎県 木村 繁

はじめに

春爛漫、どこまでも青く澄んだ長崎の空、小鳥が家の近くでチツチツと鳴きながら、楽しそうに飛び交っている。家の中からガラス越しに庭の盆栽に目をやると、緑の色が大分濃くなつてきた。今は、妻と二人で定年後の人生をのんびりと元気に過ごしている。平凡だが幸せに暮らしているのは、自分たちの努力の結果でもあるけれど、もつと奥深い我が国の歴史にあることに気付く。日清、日露戦争、さらに大東亜戦争が勃発し、欧米の列強国を相手に戦うことになった。ときに昭和十六（一九四一）年十二月八日であつた。

少年時代の私は、清津府北星町の我が家で軍艦マーチと共に流れてくる大本営発表をラジオで聞いて、子供心に日本の軍隊は世界一強いんだと感